

18) レンゲソウ＝蓮華草

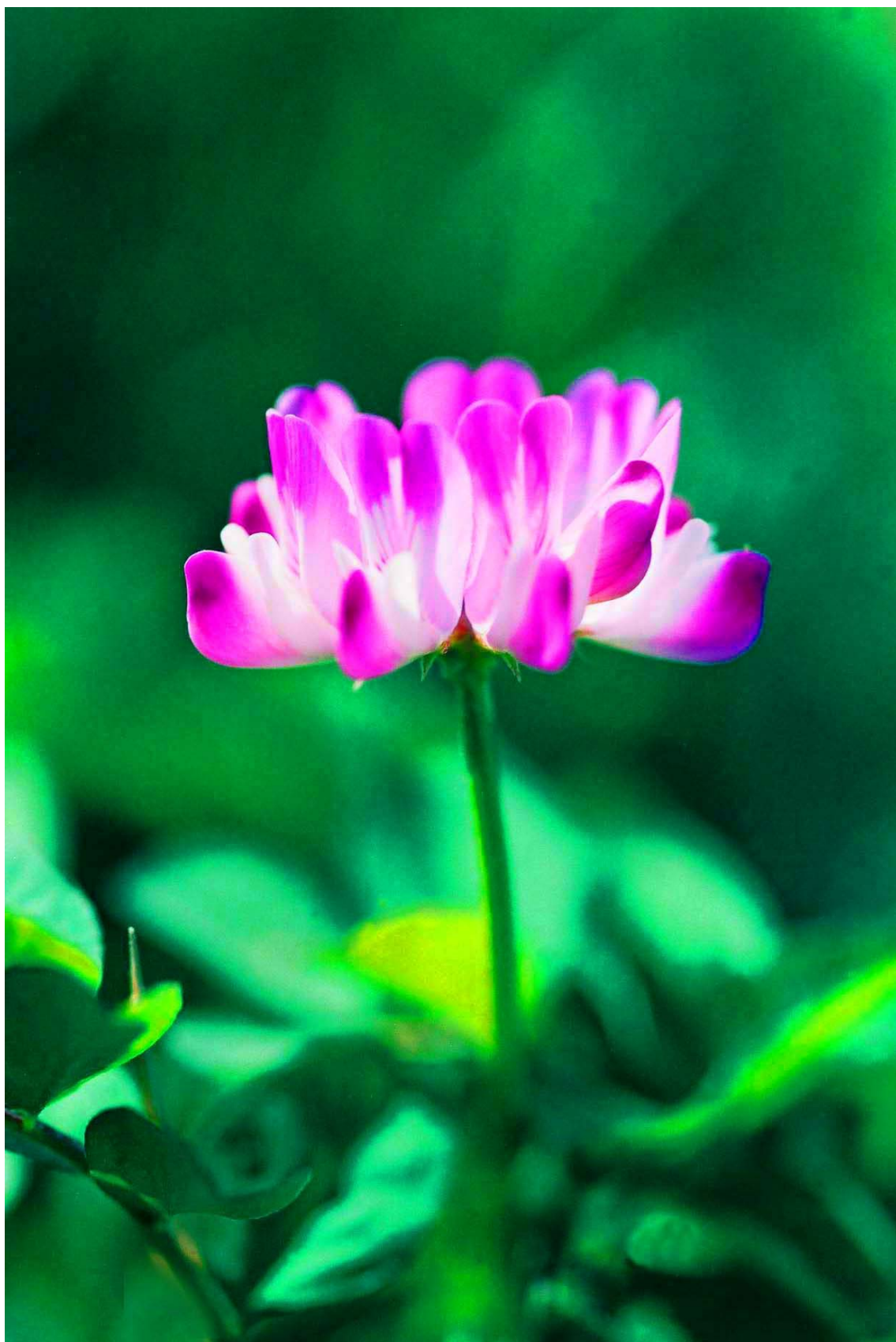
レンゲソウはマメ科ゲンゲ属の越年草である。原産地は中国でオーストラリアを除く世界の各地に広く分布し、世界では約 1,500 種にも及ぶ。日本では春の花として長年親しまれてきたが、日本に渡来したのは意外に遅く、江戸時代の初め頃と思われる。またレンゲソウの根は多くのマメ科植物の特徴として、根粒バクテリアが共生し、空中の窒素を固定して貯える事はよく知られている。このためかつては大事な「緑肥」として、牧草地や水田の裏作として栽培されていたが、最近では化学肥料の普及により、あまり見られなくなってしまった。むしろ野性化したものが田や道の縁、土手や川原などのよく陽の当たるところに見られる。高さは 10~30cm ほどで、茎は根元から枝分かれして、地表を這うように横に伸びる。葉は奇数羽状複葉で、春 4 月頃に葉腋から花柄を出して、淡紅紫色、稀に白色の蝶形の花を輪状に 7 つほど着ける。和名の由来は花が輪状に着ける様子を、蓮の花にたとえたものである。別称としては蓮華と同じ意味でシャカバナ、ゴクラクバナ、さらにはコヤシグサ、ショウメグサ、アズキバナ、ミヤコバナ、ホウドウバナなど、さまざまな異名がある。ホウドウバナは漢字で書くと宝幢花で、幢は幡のことで花が幡のように揺れる様を言ったものであろう。学名は『*Astragalus sinicus*』で、属名はマメ科植物を表すギリシャの古語に由来し、種小辞は中国のという意味である。中国名は『翹揺』もしくは『紫雲英』で、これはゲンゲと読む。イギリスでは『milk vetch』と呼んでおり、これは羊が食べると乳をよく出すからで、『vetch』はスズメノエンドウのイギリス名である。

レンゲソウは人間にとって大変重要な植物で、水田の裏作や牧草として利用される他に、羊や牛の飼料として、また蜜源植物としても高い価値がある。花が終わってしばらくすると田の中によくすき込み、水を引いて田植えに入る。また若芽は食用にもなり、油で炒めたり天ぷらにしたり、芽先はお浸しや胡麻和えなどにして食べる。茎葉を乾燥させたものは民間薬として解熱や利尿にも効果があるといわれている。

江戸時代の文献『本草正偽』(ホンゾウセイギ)では、レンゲソウを緑肥や飼料として用いていた記述がある。ひところは化学肥料万能の中で、レンゲの栽培はほとんど見られなくなってしまったが、最近の有機栽培ブームの中で再びこの草は注目されている。昔はこの花を摘んで子供が花束やブーケを作ったり、またティアラに編んだり、タンポポの茎にレンゲをさして風車にしたりして遊んだものだが、レンゲの減少とともにそんな風趣もいつのまにか消えてしまった。こうした風物が回復されることは嬉しいことである。話は変わるが、播磨の俳人滝野瓢水が詠んだ

手に取るな やはり野に置け 蓮華草

の句は、遊女の身請けをしようとした友人を、諫めるために詠んだ句と言われており、野の花は摘んだり、庭に植えるのではなく、野に咲いているから美しいのだという意味を伝えるために詠んだ句として、今日に伝わっている。



その昔、白花の蓮華草を見たことがあったが、カメラを持ってなかった。残念である(寄居町)。



蓮華草の花を真上から見るとこんな形をしている。いかにも優し気で、独特な風情がある。蓮華畑の復活を願うのは、筆者だけではないはずだが・・・(埼玉県寄居町)。



蓮華草の花畑は見られなくなってしまったが、復活の兆しもある(埼玉県寄居町)。

[目次に戻る](#)